

第3回加賀ふるさと検定【初級問題の正解及び解説編】

1 橋立大野山遺跡は、当市における（ ）時代の代表的な遺跡の一つで、ここからは県内最古の土器とされる尖底楕円押型文土器せんていだえんおしがたもんの一部が出土している。

- ①縄文 ②弥生 ③古墳 ④白鳳

加賀市内の代表的な縄文時代遺跡としては、「橋立大野山遺跡」「柴山水底貝塚」「柴山貝塚」「横北遺跡」「藤の木遺跡」などがありますが、この中で特に古い時代のものは縄文時代早期（今からおおよそ9千年前）の橋立大野山遺跡で、ここからは尖底楕円押型文土器と呼ばれ、底部が尖った砲弾のような形をしている県内最古の土器が出土しています。【正解率52.0%】

2 現皇室の直接の先祖とされる（ ）天皇は、越前の豪族で、その母、フリヒメの母方の家系は、当地、江沼郡の豪族だといわれている。

- ①応神 ②継体 ③推古 ④桓武

第26代目の天皇である継体天皇（オホドノ王）はもと越前の豪族でした。『日本書紀』や『上宮記』には、継体天皇の父ヒコウシノ王は近江高嶋の出身。母のフリヒメは越前三国の出身で、さらには、その母方の祖母アナニヒメは、現在の加賀市域である江沼の出身と記されています。【正解率46.1%】

3 奈良（ ）が所蔵する正倉院文書の中には、当地方の最も古い戸籍といえる「越前国江沼郡山背郷計帳」の一部が残されている。

- ①薬師寺 ②法隆寺 ③興福寺 ④東大寺

正倉院は、奈良東大寺大仏殿の北側に位置する、校倉造（あぜくらづくり）の高床式倉庫で、天平時代を中心とした多数の美術工芸品や書跡などが収蔵されています。天平12年（740）の「越前国江沼郡山背郷計帳」は、北陸道に関する唯一の籍帳（戸籍と計帳）です。江沼臣族の一族を家族単位でリスト化されており、氏名や家族関係、その人の特徴までも記録されておりとても興味深いものです。【正解率33.3%】

4 山代温泉（ ）に安置にされている木造十一面観音像は、もと大聖寺慈光院の本尊とされ、平安時代末期の白山信仰の本地仏として貴重である。

- ①薬王院 ②専光寺 ③市之瀬神社 ④服部神社

山代温泉薬王院に安置されている「木造 十一面観音像」は、もと大聖寺慈光院の本尊として祀られていましたが、関ヶ原の戦いの折、大聖寺城主山口玄蕃頭が前田利長に攻め滅ぼされた際に、池の中に投げ入れられ難を逃れたと伝えられています。明治維新後、同じ白山五院のひとつであった薬王院に移されたものです。平安時代末期の白山信仰の本地仏として貴重な仏像であり、現在、石川県の有形文化財に指定されています。【正解率82.4%】

5 鎌倉時代、東国御家人の一人で、伊豆国を拠点としていた狩野氏は、江沼郡内の庄園を治める（ ）となって勢力を誇った。

- ①肝煎きもいり ②郷長ごうちょう ③地頭じとう ④国主こくしゅ

鎌倉時代から南北朝時代にかけて、江沼郡では、平安時代末以来の武士は姿を消し、代わって東国御家人の外来地頭が勢力をもつようになりました。その代表が狩野氏です。狩野氏は伊豆を本拠とする一族ですが、13世紀半ば以降、江沼郡福田庄の地頭として登場し、やがて庄内の菅生社の領有権をも入手するようになり、江沼郡で最も有力な国人（土豪）にまで成長しました。【正解率62.7%】

6 約百年余り続いた加賀一向一揆勢の支配にピリオドを打ったのは、長篠の合戦で武田軍を破り、北陸を平定した（ ）であった。

- ①徳川家康 ②織田信長 ③朝倉宗滴 ④前田利家

天正3年(1575)長篠の合戦(現愛知県新城市)では、鉄砲の三段撃ちにより優位にたった織田軍が武田勝頼軍を破りました。これを契機に、織田信長は、北陸を平定するために越前に侵入しました。羽柴秀吉や柴田勝家らの織田軍の先鋒は、加賀へ討ち入り、大聖寺、敷地、山中の各城を攻め落とし、江沼郡を占領しました。その後、能美の一揆勢も破って手取川まで進出しました。ここに、江沼・能美の両郡は、百年近くに及んだ一向一揆と本願寺配下から離され、新たに織田信長の占領下に入ることとなりました。【正解率68.6%】

7 慶長5年、関ヶ原の戦いが起こったことで、当地においても、東軍について金沢城主前田利長と西軍について大聖寺城主（ ）との間で激しい戦いが起こった。

- ①前田利治 ②柴田勝家 ③山口玄蕃 ④溝口秀勝

慶長5年(1600)7月に家康を筆頭とする東軍と、毛利輝元を総大将にたてて参戦した石田三成を筆頭とする西軍との間に戦いがおこりました。結果は東軍、家康側の勝利となりましたが、当地でも東軍と西軍で戦いがおこりました。大聖寺城主山口玄蕃は、秀吉の家来であったために西軍に、一方、金沢城主前田利長は、家康側の東軍についてたため、同年7月、前田軍率いる2万5千人の大軍が僅か1200人余で守る大聖寺城に攻め込みました。この戦いで1山口軍は、僅か1日で壊滅し、およそ800人の家臣が討ち死しました。【正解率79.4%】

8 加賀藩3代藩主前田利常は、寛永16年の隠居に際し、2男利次に富山藩10万石を、3男利治に大聖寺藩（ ）を分割し、それぞれ支藩として独立させた。

- ①2万石 ②5万石 ③7万石 ④10万石

加賀藩3代藩主前田利常は、寛永16年(1639)に長男光高(4代)に藩主を譲り、小松に隠居しました。この時、2男の利次に富山藩10万石を、3男の利治に大聖寺藩7万石を分け、支藩として独立させました。その結果、それまで119万石をもっていた加賀藩は、光高の80万石と利常の養老領22万石を合わせて102万石となりました。【正解率71.6%】

9 大聖寺藩最後の藩主である前田利としか常は、初代藩主前田利治から数えて、第（ ）代目となる。

- ①12 ②14 ③16 ④18

前田利常は、天保12年(1841年)6月12日、加賀藩主・前田斉泰の七男として生まれました。当初は、加賀藩士・前田貞事の養子となって、その家督を継いでいましたが、安政2年(1855年)に大聖寺藩で藩主を継いでいた兄の利義(12代)、利行(13代)が相次いで死去したため、利行の末期養子となって、第14代目の大聖寺藩主となりました。利常は、その後、明治2年の版籍奉還で大聖寺藩知事となり、明治4年の廃藩置県で免官され、大正9年、80歳で死去しました。【正解率82.4%】

10 大聖寺神明町の()には、市指定の文化財である五百羅漢が残されており、元禄年間、松尾芭蕉が「奥の細道」の行脚の途中に泊まった寺としても知られる。

- ①実性院 ②蓮光寺 ③全昌寺 ④正覚寺

大聖寺山ノ下寺院群の一つ、全昌寺は、元禄2年(1689)8月に、俳人松尾芭蕉が「奥の細道」の行脚の途中に泊まった寺として有名です。このとき詠んだ句が「庭掃いて 出ばや寺に散る柳」です。この全昌寺は、大聖寺城主山口玄蕃頭宗永の菩提寺でもあり、また、517体におよぶ、彩色がほどこされた五百羅漢が全てそろっている羅漢堂があることでも知られています。【正解率77.5%】

11 大聖寺藩領内における、小塩辻村の鹿野小四郎を代表とする有力農民は、()と称する役職に任じられ、農村を管理した。

- ①奉行 ②村長 ③十村 ④区長

十村制は、江戸時代に加賀藩の第3代藩主前田利常は、徴税を円滑に進めるために、地方の有力な農民を「十村」として、農村全体を管理監督させました。この制度は加賀藩・富山藩・大聖寺藩における独特の役職でした。大聖寺藩における代表的な十村が、右(三木)の堀野新四郎や分校の和田半助、小塩辻の鹿野小四郎、動橋の橋本源左衛門などでした。【正解率93.1%】

12 大聖寺の南側のはずれ、下屋敷から神明町にかけての一带は、禅宗・浄土宗・日蓮宗などの各派の寺院が並んでおり、()寺院群と呼ばれている。

- ①山ノ下 ②地方 ③下屋敷 ④山寺

大聖寺藩は、江戸時代初期、隣の越前との国境付近であったところに意識的に、曹洞宗、日蓮宗、法華宗、浄土宗などの寺社を集めたと言われています。その場所が、現在の大聖寺下屋敷から神明町にかけての「山ノ下寺院群」と呼ばれるところで、実性院・蓮光寺・久法寺・全昌寺・正覚寺・宗寿寺・本光寺・神明宮の7寺院、1神社が並んでいます。なお、浄土真宗の寺は城下の町中に移されました。【正解率83.3%】

13 大聖寺の豪商()は、文政6年、九谷焼を再興しようと、現在の山中温泉九谷町の古九谷の窯跡のすぐ傍らで、新たに窯を築いた。

- ①豊田伝右衛門 ②後藤才次郎 ③田村権左右衛門 ④飯田屋八郎右衛門

大聖寺の有力町人であった吉田屋は、代々大聖寺の豪商として知られ、大聖寺藩に多額の献金をし、名字帯刀を許され、豊田の姓を賜っていました。特に、四代 伝右衛門は、かつて素晴らしい焼物を焼いていた古九谷を復活させたいと、文政6年(1823)に九谷の聖地である、山中温泉の奥、九谷古窯跡の横に窯をつくりました。この時、彼は72歳でした。しかしながら、交通の利便性の悪さなど

から文政9年（1826年）には山代村の越中谷に移窯しました。【正解率32.4%】

14 加賀市の橋立、塩屋、（ ）の3カ村は、江戸時代から明治時代にかけて活躍した北前船の船主や船頭^{はいしゅつ}を輩出し、「北前船のふるさと」として知られる。

- ①篠原 ②小塩 ③片野 ④瀬越

大聖寺藩の橋立村・塩屋村・瀬越村では、いずれも北前船が接岸できる湊をもっていませんでしたが、18世紀後半頃から多くの北前船主や船頭を輩出し「北前船のふる里」として栄えました。瀬越村は、400年もの間、海運業一筋の家業を続けた廣海二三郎と、早くから和船を汽船に切り換え、海外航路を切り開いたことで知られる大家七平の2大船主が出ました。【正解率81.4%】

15 元禄2年、俳人松尾芭蕉は「奥の細道」の行脚の途中、山中温泉の湯宿「泉屋」に（ ）した。

- ①2泊 ②4泊 ③6泊 ④8泊

元禄2年、俳聖、松尾芭蕉は「奥の細道」の旅の途中、7月27日から8月5日までの間で、山中温泉の湯・宿泉屋に8泊しました。この間、芭蕉は薬師堂を詣で、温泉につかり、風光明媚な景色を心から楽しみ、山中を「扶桑三の名湯」と讃え、「山中や 菊は手折らじ 湯の匂ひ」の一句を詠みました。【正解率43.1%】

16 加賀市（ ）は、江戸時代には茶屋が立ち並び、17匹におよぶ馬が置かれるなど、北国街道の宿駅^{しゅくえき}として賑わった。

- ①三木町 ②吉崎町 ③橋町 ④熊坂町

「橋宿」(たちばなしゅく)は、701年、大宝律令制定で駅制が施行されてより、北国街道の宿駅として賑わいました。親鸞聖人の越後流罪の時、この街道を下向し、吉崎御坊に滞在中、橋茶屋で休憩をとったと伝えられています。一向一揆の激戦地ともなり、藩政時代は参勤交代の本陣が設けられ、加賀越前の国境の要所として番所が置かれました。俳人芭蕉や加賀の千代女もこの橋茶屋に立ち寄りました。【正解率56.9%】

17 大聖寺神明町の宗寿寺正門は、もと大聖寺藩の（ ）で使われていた門とされ、現在、加賀市の指定文化財となっている。

- ①作事所 ②関所 ③藩邸屋敷 ④吟味所^{ぎんみしよ}

大聖寺藩の関所は、明治2年、廃藩置県により廃止されましたが、そこで使われていた門は、宗寿寺の檀家であった家老生駒一彦の口利きで宗寿寺の境内に移されたと伝えられています。現在、宗寿寺の正門は、瓦葺の屋根がついていますが、もともとは屋根のない柵門であったと考えられています。【正解率72.5%】

18 民謡「山中節」は、湯治^{とうじ}に訪れた北前船の船頭衆たちが、北海道の追分^{おいわけ}を（ ）と称する娘たちと唄いあつた中で生まれたといわれる。

- ①ゆかたべ ②あらいべ ③はおりべ ④ねまきべ

江戸時代から明治期にかけて、山中温泉には、浴衣娘（ゆかたべ）と称する少女たちがいました。彼女たちは、14歳から15歳頃までの女中見習いで、浴客を総湯まで案内し、入浴中、浴衣を預かることが仕事でした。北前船の船頭衆が湯治の際、松前追分を歌い、それを浴衣娘たちがまねて山中訛りで歌ったのが始まりと言われていています。【正解率79.4%】

19 明治8年、富士写ヶ岳の山麓で良質の黒鉛が発見され、この黒鉛を利用して、同10年に、大聖寺松島町付近で（ ）を製造する会社が創設された。

- ①鉛筆 ②弾薬 ③マッチ ④電池

明治8年、富士写ヶ岳山麓の片谷村で良質の黒鉛が発見されました。この黒鉛を利用した鉛筆製造を思いついたのが旧大聖寺藩士で、当時、大蔵省の役人をしていた飛鳥井清でした。彼は、この鉛筆製造を窮乏していた旧大聖寺藩士の土族授産の一助にしたいと考えたのでした。明治10年(1877)12月、飛鳥井は同じ旧藩士の柿沢理平を工場長にして、日本で最も早く、「加州松島社」という鉛筆製造会社を大聖寺松島町に創設しました。【正解率97.1%】

20 江戸時代より、大聖寺は絹織物の主産地で知られたが、特に、明治期以降、大聖寺の（ ）は、真っ白で肌触りがよく全国的に人気があった。

- ①羽二重^{はふたえ} ②紬^{つむぎ} ③縮緬^{ちりめん} ④友禅^{ゆうぜん}

江戸時代より、庄や大聖寺において生産された絹織物は、近代においても江沼郡における最も重要な工業製品でした。なかでも、「羽二重」と称する製品は、生糸を平織りにしたもので、真っ白で肌ざわりがよく、また、上品な光沢もありました。江沼郡では主に大聖寺で生産されたため「大聖寺羽二重」として全国に知られ、海外にまで輸出されました。【正解率74.5%】

21 当地では、電力の必要性をいち早く感じていた（ ）たちが中心となって、明治44年に大聖寺川水力発電株式会社を設立した。

- ①機業家 ②旅館主 ③北前船主 ④町村長

明治44年、江沼郡において「大聖寺川水力発電株式会社」が創立されました。この会社を立ち上げたのは、大坂や神戸、京都、函館など、早くから電灯がついていた都市をじかに見て、電力の必要性をいち早く感じていた北前船主たちでした。その初代社長には橋立の北前船主、西出孫左衛門が、また、取締役のほとんどは北前船主たちで占められていました。【正解率52.9%】

22 明治33年5月、大聖寺と（ ）との間に線路が敷かれ、江沼郡で最初の馬車鉄道が開通した。

- ①動橋 ②山代温泉 ③河南 ④山中温泉

明治30年、北陸線の敷設工事により大聖寺駅がオープンしましたが、本線から奥まったところに位置する山中温泉では、宿泊客が遠のくのではという危機感がうまれました。そのため、山中温泉の有志により、「山中馬車鉄道株式会社」が設立され、明治33年5月、山中温泉と大聖寺駅を結ぶ8.6kmの馬車鉄道が開通しました。【正解率44.1%】

23 昭和33年1月、江沼郡の大聖寺町や山代町、片山津町など（ ）ヶ町村が合併し、現在の加賀市の前身にあたる「旧加賀市」が誕生した。

- ① 7 ② 8 ③ 9 ④ 10

昭和31年、江沼郡では、石川県の合併基本計画が作成されたこともあり、それまでの6町4村（大聖寺町・山代町・山中町・片山津町・動橋町・橋立町・三木村・三谷村・南郷村・塩屋村）を一つにして「江沼市」にできないか検討が始められました。この年の12月、山中町を除く9町村の町長や村長、議長で構成する「新市建設委員会」が結成されました。また、態度を決めかねていた山中町に対しては、知事勧告や内閣総理大臣の合併勧告も発せられましたが、ついに同意がなされずに、結局、昭和33年1月に、山中町を除く9町村の合併により「加賀市」が誕生しました。【正解率34.3%】

24 江戸時代より昭和初年頃まで、食事をする際は、家族それぞれが（ ）と呼ぶ、日頃は食器を入れておく小さな箱を使った。

- ①箱膳 ②卓袱台^{ちゃぶ} ③食事箱 ④食卓膳

昔は、家族一人ひとりが、自分専用の飯碗や汁碗・小皿・箸などが入った「箱膳」をもっていました。食事の際に棚から取り出し、箱の蓋を裏返しその上で食事をしました。食事が終わると、箱の中に各自の食器を入れて再び棚に片付けました。その後は、「ちゃぶ台」や「飯台」とよぶテーブルを囲んで、家族と一緒に食事をするようになりました。【正解率77.5%】

25 動橋町の（ ）神社には毒蛇伝説があり、この伝承に基づいて行われている祭事が現在の「ぐず焼き祭り」である。

- ①動橋 ②白山 ③振橋 ④八幡

動橋町の「振橋神社」は、もとは白山神社と称していましたが、明治23年に改称されました。この振橋神社には、「昔、毒蛇が住んでいて、深夜、年頃の女の子を奪っていくことがあり、人々は大変恐れていた。たまたまこの地を通り過ぎた大己貴神は民が苦しむ姿を見て、すぐにこれを退治した。人々は神に感謝し、小さな祠を建てた。」という伝承があります。また、昭和初年、地元の青年たちが、この毒蛇伝説に基づき、現在の「ぐず焼き祭り」を始めたといわれています。【正解率66.7%】

26 「ぜいたく煮」あるいは「いなか煮」と呼ばれている当地の郷土料理とは（ ）を甘く煮込んだ料理のことである。

- ①サツマイモ ②カモリ ③ゼンマイ ④タクワン

ひと冬を越した「たくわん」の漬物は、だんだん酸っぱくなってきます。それを水につけて塩出しをして、甘く煮込んだものが「ぜいたく煮」あるいは「いなか煮」「ふるさと煮」などと呼ばれている料理です。漬物作業から煮物にするまでの手間隙を考えれば大変贅沢な料理だといえます。現在も、スーパーなどでパックに入って売られています。【正解率59.8%】

27 当地の方言である（ ）は、主に「いやな・気にいらない」の意味で使われた。

- ①けなるい ②あてがい ③こすかん ④べんこな

当地の方言で、嫌な、気に入らない、いけ好かないの意味で、「こすかん」という言葉が使われました。「こすかん人やし、一緒に行かんわ」「こすかんこと言わんといて」などと、現在でも使う人がいるのではないのでしょうか。【正解率 86.3%】

28 加賀市は石川県の最西南端に位置し、周囲 98.5 km、面積は約 () km²である。

- ①206 ②306 ③406 ④506

加賀市は、石川県の最西南端に位置し、南西方は福井県、東方は小松市に接し、北西に走る海岸線は日本海に面しています。加賀市の周囲は98.5km で、このうち16.5km が日本海と接する海岸線となっています。市の面積は306 km²で、このうち田畑である農地が約35.3 km²、山林が 211.8 km²を占めています。【正解率89.2%】

29 当地で最も高い山とされる大日山の頂上は、加賀市と小松市の境界に位置するところで、その標高は () mである。

- ①1,280 ②1,368 ③1,482 ④1,684

大日山は、福井県勝山市と石川県の小松市、加賀市にまたがる標高1368mの山です。その頂上は加賀市と小松市の境界に位置するところとなっています。山名は大日如来を祀ったことに由来しているといわれています。市の2大河川である大聖寺川、動橋川は、いずれも、この大日山を源流としています。【正解率73.5%】

30 加賀市の気温や降水量などは、() に設置された観測所にて計測されている数値である。

- ①加賀市役所 ②加賀温泉駅 ③加佐ノ岬 ④山中温泉菅谷町

気象庁は、全国約1,500ヶ所に気温や降水量、風速、積雪量などを計測する「地域気象観測所」、通称アメダスと呼ばれる無人の気象観測装置を設置しています。石川県内には、全部で16か所の観測所があります。加賀市内では、昭和53年に、山中温泉菅谷町地内に観測所が設けられました。【正解率73.5%】

31 大日山や富士写ヶ岳の中腹には、() が多く見られ、ここでは、長年積もった落ち葉が雨水を吸収し下流に水を供給するので、「天然のダム」と言われている。

- ①ブナ林 ②杉林 ③松林 ④ヤブツバキの森

加賀市の植生のほとんどはヤブツバキクラス域と称する常緑広葉樹林帯ですが、山中温泉から奥の山間部はブナクラス域と称する夏緑広葉樹林帯となります。特に、大日山や富士写ヶ岳の中腹にはブナ林が多くみられます。ブナ林は、永年積もった落ち葉がスポンジのように雨水を吸収し、安定して下流に水を供給してくれるので「天然のダム」と言われています。【正解率73.5%】

32 大聖寺川は、全長 () kmで、県内では手取川、梯川に次ぐ 3 番目に長い川となっている。

- ①38 ②48 ③58 ④68

当市には、大聖寺川と動橋川の2大河川がありますが、いずれも2級河川で、大聖寺川は大日山を源流とし、全長38.0km、動橋川は約20.4kmとなっています。県内では全長65.5kmの手取川が最長で、その次が42kmの梯川、大聖寺川は県内では3番目に長い川となっています。【正解率69.6%】

33 柴山瀉の面積は、現在、約1.7㎏であるが、これは昭和29年から始められた干拓工事によって埋められたもので、それまでは約（ ）㎏であった。

- ① 2.4 ② 3.4 ③ 4.4 ④ 5.4

柴山瀉は片山津温泉や柴山町に取り囲まれた、面積約1.7㎏、周囲約6.2kmの小さな湖です。「越前加賀海岸国定公園」に指定されており、今江瀉、木場瀉とともに「加賀三湖」と呼ばれていました。昭和29年、国営加賀三湖干拓建設事業により、今江瀉の全部と柴山瀉の3分の2が埋められ水田となりました。これにより、柴山瀉は、もと5.45㎏の大きさがありましたが、そのほぼ1/3である1.7㎏の小さな瀉となりました。【正解率73.5%】

34 国指定天然記念物「鹿島の森」では、森の中に暮らし、木によじ登る（ ）が見られる。

- ①ムラサキヘビ ②アカテガニ ③アオガエル ④ミドリガメ

鹿島の森では、アカテガニ・クロベンケイガニ・ベンケイガニの3種のカニが生息しています。特に、アカテガニは乾燥した所でも適応し、高いところに登る習性があり、木によじ登る姿を見ることができます。これらの陸ガニは、森をすみかとするので他の水中生物とは異なり、昆虫などを餌にすることができるのです。【正解率84.3%】

35 山中温泉荒谷町の石川県内水面水産センターには、国指定天然記念物（ ）が飼育されている。

- ①トキ ②ライチョウ ③ニホンカワウソ ④オオサンショウウオ

オオサンショウウオは世界最大の両生類といわれ、現在、国の天然記念物に指定されています。世界では日本・中国・アメリカでしか生息が確認されていません。国内では岐阜県以西と九州・四国の山地の河川上流域に生息しています。現在、山中温泉荒谷町の石川県内水面水産センターで2匹が飼育されていますが、このうちの1匹は昭和48年（1973）に大聖寺川鶴仙溪で保護されたものです。平成18年（2006）の個体調査では全長135cm、体重19.2Kg。国内で確認されているものでは最大級であることが判明しました。【正解率91.2%】

36 二子塚町の国指定史跡「狐山古墳」は、加賀市内の平野部に残る希少な（ ）の遺跡である。

- ①方墳 ②円墳 ③前方後円墳 ④前方後方墳

昭和7年、二子塚町の北側にあった小高い墳丘から石棺からは壮年男子の骨が入った石棺とおびただしい数の副葬品が発見されました。これが狐山古墳です。調査の結果、長さ56mの前方後円墳であることが分かりました。平野部に作られていることや副葬品の種類・量から、江沼地方を治めた豪族の墓ではないかと考えられています。【正解率72.5%】

37 大聖寺鍛冶町出身の（ ）は、1枚の鉄板から、複雑な形をした鶏や兎、猿などの小動物を造り出す金工家として世界的に知られた。

- ①西出大三 ②佐々木泉景 ③山田宗美 ④浅井一毫^{いちもう}

山田宗美は大聖寺鍛冶町出身の金工家で、明治24年、一枚の鉄板から全形を打ち出しする独自の鋸起法を創案し、鶏・猿・兎などの小動物を中心として多くの作品を制作しました。明治期から大正期にかけて、パリ万国博覧会をはじめ、各地の展覧会に出品し高い評価を受けました。【正解率72.5%】

38 毎年2月10日、大聖寺敷地の菅生石部神社^{ごんがんしんじ}では、竹割りの奇祭である御願神事が行われているが、この神事は現在、（ ）の無形民俗文化財に指定されている。

- ①加賀市 ②石川県 ③国 ④ユネスコ

大聖寺敷地の菅生石部神社には、「その昔、この地に大蛇がすんでいて、毎年、未婚の娘を差し出さないと田畑を荒らしてしまうので、この大蛇を退治するために神事を行なうようになった」という伝承があります。白装束の青年たちが青竹を打ちつけ、大蛇にみたてた大縄を境内にて引き回す、この奇祭は現在、石川県の無形民俗文化財に指定されています。【正解率39.2%】

39 加賀市（ ）町では、毎年、八月のお盆に、笛や太鼓の囃子がない「シャシャムシャ踊り」が伝えられており、現在、市の無形文化財となっている。

- ①塩屋 ②瀬越 ③橋立 ④三木

「シャシャムシャ踊り」は、加賀市塩屋町を中心に、周辺の吉崎町・永井町に伝わる盆踊りです。「シャシャムシャ」とは、「笹叢」という言葉が訛ったものといわれ、別名「蓮如踊り」とも言われています。笛や太鼓の囃子がまったくない哀調を帯びた素朴な踊りとして、市の無形民俗文化財に指定されました。【正解率64.7%】

40 石川県指定文化財である（ ）は、尾小屋鉦山などを経営していた横山章が金沢市内で建てた建物であるが、大正10年に山中温泉に移築されたものである。

- ①無垢庵^{むく} ②無限庵^{むげん} ③無常庵^{むじょう} ④無心庵^{むしん}

無限庵は、尾小屋鉦山などを経営していた横山章（旧加賀藩家老職の家系である横山家13代隆平の分家）が、大正元年に金沢市高岡町の自邸内に建てた書院で、当時、金沢の木造建築技術の粋を集めた建物といわれていました。鉦山経営が悪化したことで、大正10年に山中温泉の新家熊吉に売却し現在の山中温泉下谷町に移築されました。【正解率82.4%】

41 伝承によれば、九谷焼は、江戸時代初期、九谷鉦山の開発に従事していた後藤才次郎が、陶業技術を学ぶために、（ ）に出向き、その技術を習得したという。

- ①筑前^{ちくぜん} ②豊前^{ぶぜん} ③肥前^{ひぜん} ④肥後^{ひご}

伝承によれば、大聖寺藩祖前田利治は領内の九谷村で陶石が発見されたのを契機に、焼物の生産を考え、万治2年、後藤才次郎を肥前有田（佐賀県）に陶業技術修得に遣わしたと伝えています。才次郎は、肥前に出向いた際、長崎で出会った、明（中国）から亡命した陶工を数名連れ帰って、古九谷窯を開いたともいわれています。【正解率54.9%】

42 大聖寺藩士（ ）は、江戸時代後期に活躍した、わが国を代表する儒学者であり、その蔵書や著作143冊は、加賀市の指定文化財となっている。

- ①田辺明庵 たなべめいあん ②草鹿蓮溪 くさかれんけい ③樫田東巖 かしだとうがん ④大田錦城 おおたきんじょう

大田錦城は江戸時代後期の儒学者。大聖寺藩医樫田幻覚の7男で、儒学諸派の中でも考証学派の代表として評価されています。市が所蔵する大田錦城の著作および蔵書143冊の中には、論語など儒教の古典籍について記した『九経談』（全10巻）をはじめ、貴重な書籍が含まれています。【正解率79.4%】

43 大聖寺藩の松奉行、小塚藤十郎は、上木・塩屋・瀬越などの海岸沿いに数多くの黒松を植えた。また、大聖寺藩領内の地誌である（ ）を編集した。

- ①「加賀江沼志稿」 ②「大聖寺地誌略」 ③「大聖寺藩史」 ④「加賀之地理」 へんさん

大聖寺藩士小塚藤十郎は、文政8年に「松奉行」となり、松の植林事業に一生を捧げました。また、弘化元年（1844）江沼郡内の沿革、村名、社寺、産物などに関する地誌『加賀江沼志稿』（32巻）を編集しました。この本は、当地の近世史を研究する上で欠くことができない重要な図書となっています。【正解率46.1%】

44 文政年間、加賀藩の御抱え絵師となった大聖寺出身の（ ）は、画家としては最高位となる「法眼」の位を得た。

- ①佐々木泉景 ②石田忘軒 ③山口梅園 ④谷文晁

大聖寺出身の絵師、既に、5才の時、加賀藩10代藩主前田重教にその才を認められていました。その後、京都へ出て石田遊汀や鶴沢探索に学び、禁裏御用の屏風などに画筆を振るいました。文政4年、加賀藩の御抱絵師となり、画家として最高の法眼位を受けました。代表作に「紙本金地着色鹿図屏風」（実性院所蔵）があります。【正解率53.9%】

45 大聖寺藩士（ ）は、幕末、金沢で黒川良安に学び、その後、大坂の緒方洪庵が主宰する「適塾」に入り、福沢諭吉や大村益次郎らと共に「塾頭」を務めた。

- ①東方芝山 ②吉田屋伝右衛門 ③渡辺卯三郎 ④竹内玄同

江戸末期における大聖寺藩の医師、渡辺卯三郎は、儒学を東方芝山に、蘭学を金沢の蘭医、黒川良安から学びました。嘉永元年、大坂の緒方洪庵の適々齋塾（適塾）に入門し、同6年第7代目の塾頭になりました。安政元年、父親の老衰により帰藩し、藩主前田利豊の侍医やとなり、藩校の洋学教授などを務めた。その後、金沢病院大聖寺分院（現在の加賀市中央病院）の創設に尽力しました。【正解率56.9%】

46 大聖寺耳聞山町出身の桂田富士郎博士は、（ ）を発見した医学者として知られる。

- ①赤痢菌 ②日本住血吸虫 ③線虫 ④梅毒スピロヘータ

桂田富士郎は、大聖寺耳聞山出身の病理学者。県立金沢医学校から東京帝大で学び、その後、医学博士となり、明治37年に猫の解剖により日本住血吸虫を発見しました。大正7年、日本住血吸虫の研究により帝国学士院賞を受けました。戦後は、大聖寺に帰り、耳聞山町の生家で診療所を開きました。錦城小学校校庭には博士の胸像がたてられています。【正解率56.9%】

- 47 江沼郡出身の人力車夫、北ヶ市市太郎きたがいちいちたろうは明治24年、大津において（ ）の皇太子が暴漢に襲われた際、その命を救ったことで、一躍英雄となった。
- ①イギリス ②フランス ③ロシア ④ドイツ

北ヶ市市太郎は、加茂村（現加賀市加茂町）出身の人力車の車夫。明治24年（1892）5月、ロシアの皇太子ニコライ（のちの皇帝ニコライ2世）一行が滋賀県大津付近を通過したとき、暴漢に襲われる「大津事件」が occurred。このとき、皇太子を救ったのが北ヶ市市太郎でした。この事件のあと、市太郎ら2名は、ロシア政府から多額の褒賞金や年金を受けました。【正解率83.3%】

- 48 大正4年、書や篆刻、陶芸、料理などで異彩を放った総合芸術家、北大路魯山人は、山代温泉とうりゅうに逗留し、九谷焼を（ ）から習った。
- ①須田菁華 ②上出喜山 ③大蔵寿楽 ④木崎万亀

魯山人は、書・篆刻・陶芸・料理研究などに秀でた総合芸術家。大正4年（1915）秋、山代に来遊し吉野家の離れに寄宿しました。この間、焼き物に関心を寄せ、陶芸家の須田菁華から九谷焼の技法などを習いました。魯山人の陶芸家としての素地は、このときに培われたものと言われています。【正解率75.5%】

- 49 世界で最初に人工雪の結晶をつくることに成功した当市片山津温泉出身の物理学者、中谷宇吉郎は、理化学研究所では（ ）の門下生となって学んだ。
- ①湯川秀樹 ②寺田寅彦 ③長岡半太郎 ④高峰譲吉

雪や氷の研究で知られる物理学者、中谷宇吉郎は作見村字片山津小字砂走（現加賀市片山津温泉）の出身。錦城小学校、小松中学、第四高等学校を経て東京帝国大学理学部物理学科に入学。卒業後は、理化学研究所で寺田寅彦の研究室員となり、寅彦から多くのことを学びました。寅彦は夏目漱石の弟子であったため、宇吉郎は漱石の孫弟子となります。【正解率53.9%】

- 50 大聖寺出身の作家、深田久弥は、昭和5年、『文芸春秋』に（ ）を発表したことをきっかけとして、大学を中退し作家活動に入った。
- ①「日本百名山」 ②「オロッコの娘」 ③「孤高の人」 ④「檸檬れもん」

作家の深田久弥は大聖寺中町出身。東京帝国大学文学部に在学中、改造社編集部勤務しました。昭和5年（1930）『文芸春秋』に小説『オロッコの娘』を発表。この作品が好評だったことに勇気を得て大学を中退、それまでの勤めを辞めて文筆一本の生活に入りました。昭和7年、『あすなろう』で

文壇的評価を確立しました。翌8年小林秀雄らと「文学界」を創刊しました。【正解率33.3%】

51 当市の基幹産業である機械製造業は、明治36年に、山中温泉の新家熊吉が自転車部品のリムを製造する（ ）が設立されたことがきっかけとなった。

- ①大同工業 ②新家商会 ③江沼チェーン ④月星製作所

新家熊吉は、江沼郡下谷村（現加賀市山中温泉下谷町）の出身。明治10年（1877）家業の木地挽き技術を受け継ぎ、轆轤を改良しました。その後、漆器の新販路開拓のために出張したロシアで自転車を見て、リムの製造を思いつきました。明治36年、熊吉は「新家商会」を設立し木製リム製造に乗り出しました。この新家商会が、当市における大同工業の始まりともいえます。【正解率78.4%】

52 山中温泉では、平成15年、宿泊客などが、温泉情緒を感じながら街並みを散策することができるよう（ ）街道を整備した。

- ①ゆげ ②菊の湯 ③芭蕉 ④湯けむり

平成9年から15年にかけて、石川県は、約22億円をかけて、山中温泉の目抜き通りである南町商店街を核としたおよそ400mの通りを「ゆげ街道」として整備しました。これにより、こおろぎ橋から鶴仙溪、あやとり橋、総湯などに回遊性が生まれました。区間には山中漆器や九谷焼、古美術品の販売店や酒屋、レンガ造りのフルーツショップなどが温泉情緒あふれる外観にリニューアルされ、多くの宿泊者が温泉街を散策する姿が見られるようになりました。【正解率84.3%】

53 昭和53年に制作された「かがし音頭」は、歌手の都はるみにより日本コロムビアからレコード化されたが、その歌い始めは「（ ）みたけりゃ 加賀市へおいで」で始まる。

- ①湯けむり ②白山 ③案山子 ④焼き物

昭和52年、旧加賀市における6代目、山下力市長のもとで、第1回「かがしまつり」が開催されました。この祭りは、多核分散型都市といわれ、地域エゴが多かった加賀市に一体感を醸成しようとして始められたものです。また、かがしと案山子との語呂合わせから、市内各団体が案山子をつくって出品する案山子コンクールも開かれました。昭和53年には、都はるみによる「かがし音頭」もつくられ、市内関係団体に配られました。【正解率49.0%】

54 加賀市では、2013年から毎年、一定のコースを限られた時間内で何周出来るかを競う（ ）と称する自転車耐久レースが、開かれている。

- ①温泉ライダー ②サイクルライダー ③チェーンライダー ④かがやきライダー

温泉ライダーは、個人またはチームで、周回コースを規定時間内で何周できるかを競う自転車耐久レースです。加賀温泉郷を自転車で駆け巡っていただきたい、そんな思いで「かがまればと協議会」が提唱し平成24年から毎年5月頃に行われています。近年では、全国の自転車競技ファンおよそ1,000人余りが参加する規模となり、ママチャリ部門やちびっこライダーの競技も行われ、年々、人気が高まっています。【正解率85.3%】

55 本年9月から、（ ）を拠点として、2人乗りの超小型電気自動車「温モビ」のレンタルサービスが開始されている。

- ①山中温泉 ②山代温泉 ③片山津温泉 ④加賀温泉駅

本年 9 月、「かがEV推進協議会」では、国土交通省の補助を受け、総事業費約 400 万円で、2 人乗りの超小型電気自動車 8 台を片山津温泉インフォメーションセンターに置いて、市内観光名所巡りができる「温モビ」レンタルサービスを開始しました。EVは最高時速 80 キロ、フル充電で約 80 キロの走行が可能で、地球にやさしい乗り物の普及で、加賀温泉郷のイメージも変わっていくのではと期待されています。【正解率 44.1%】

専門テーマ「山中漆器」

56 「山中漆器」は、天正年間、越前から山伝いに山中温泉の（ ）に木地師が移住したことを起源とする伝承がある。

- ①大土^{おおづち} ②杉水^{すぎのみず} ③真砂^{まなご} ④九谷

伝承によれば、山中塗りの起源は、安土桃山時代の天正年間（1573～92）に、越前から山伝いに、山中温泉の上流約20kmの真砂という集落に木地師の集団が移住したことが始まりといわれています。その後、山中塗は山中温泉の湯治客への土産物として造られるとともに、江戸中頃からは会津、京都、金沢から塗りや蒔絵の技術も導入し塗り物の産地として発展しました。【正解率76.5%】

57 山中漆器で使われている「漆」は、古くは日本国内で産出されたものを使っていたが、現在、そのほとんどは（ ）からの輸入品を使用している。

- ①韓国 ②台湾 ③中国 ④ロシア

林野庁の発表では、平成 23 年度における「漆」の国内消費量の 97%は中国産となっています。国内での漆の生産地は、岩手県の浄法寺地区などに限られており、その生産量も 1,3kg 程度となっているために価格も中国産の 5 倍から 10 倍近くにもなります。そうした状況のために、山中漆器に使われる漆も、ほぼ 100%近くが中国産となっています。【正解率 86.3%】

58 山中漆器は、昭和に入ってから合成樹脂を素材とした近代漆器を導入し、伝統漆器と併せた生産額は、現在、日本で（ ）となっている。

- ①第 1 位 ②第 2 位 ③第 3 位 ④第 4 位

木質の伝統的漆器に限定すると、輪島塗や木曾漆器、会津漆器などの生産額は大きいのですが、樹脂製の近代漆器の生産額を合わせた総生産額では、現在、山中漆器は、香川や輪島、紀州、越前などの漆器生産額を抑えて、全国第 1 位となっています。【正解率 44.1%】

59 山中漆器の技法では、蒔絵の名人、大下雪香と、木地引きの名人で千筋挽きや拭き漆技法などを創始した（ ）の 2 人が広く知られている。

- ①後藤才次郎 ②筑城良太郎^{ついき} ③会津屋由蔵^{あいづ やよしぞう} ④小野彦次郎

山中漆器における千筋挽きや拭き漆仕上げなどの技法を考案したのが筑城良太郎です。良太郎は山中漆器職人であった父親などから轆轤挽き技術を学び、明治 26 年には挽き物木地に直接、生漆を塗

布し磨き上げる「拭き漆」技法を開発し、山中漆器の名声を高めました。【正解率59.8%】

- 60 山中温泉上原町の川北良造氏は、山中漆器を製作する際に必要とする轆轤ろくろをつか
った挽物技法ひきものを高度な芸術の域までに高めたとして、平成6年、いわゆる
() に認定された。
- ①名誉県民 ②国民栄誉賞 ③人間国宝 ④日本遺産

山中温泉上原町の川北良造は、父のもとで木工の挽物技法を習得しました。その後、氷見晃堂に師事し、昭和37年に日本伝統工芸展での初入選をかわきりに、以後、さまざまな展覧会で入選し、平成6年(1994)に重要無形文化財保持者、いわゆる人間国宝の認定を受けました。山中漆器伝来の轆轤を使った挽物技法を高度な芸術の域まで高め、木の素材が活かされた現代感覚あふれる氏の作品の評価は高いものがあります。【正解率91.2%】